
ハットトリックなんて呼ばせない！

野生

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ハットトリックなんて呼ばせない！

【Nコード】

N4561BA

【作者名】

野生

【あらすじ】

親の海外転勤について行かず、田舎の実家に帰ることを選択した静樹。

田舎に向かう途中、静樹は幼いころに「帰ってきたらお嫁さんにして」と自分に頼んだ、いつも帽子を被るのっちという少女のことを思い出す。

田舎に帰り静樹がご神木へ向かうと、タヌキの獣帽子を被った少女に猟銃を突き付けられた。彼女の名は雷道^{らいどう}乃子。静樹が幼いころに約束した女の子だった。

しかし、静樹が乃子と一緒に家に帰ってみると、そこにはさらに二人の女の子がいた。のほほんとした雰囲気であわら帽子を被る大和撫子の野永みのり。地元球団の野球帽を被るボーイッシュな野々市ツカサ。彼女たちも、自分は静樹と約束したと名乗り出る。

学校の美少女さんにと仲よくする静樹は、転校初日で学校中の敵に！しかも、校長先生までもが静樹の転校を阻止にかかる。

はたして、静樹は校長の無理難題を突破することができるのか？

そして、静樹が約束した帽子の女の子は誰なのか？

プロローグ

プロローグ

荷物の大半は引越し業者が運んで行ったおかげで、手荷物は小さなリュック一つ。都心から地方へと走る列車は、この春に上京する若者を乗せた新幹線と何度もすれ違った。

親の海外転勤。静樹は日本、しかも故郷の祖父母の家に残ることを選択した。

揺れる列車はコンクリートジャングルから脱出し、田園が広がる田舎へとんびり走行で向って行く。

旅の楽しみと言えば駅弁。故郷へ帰る楽しみからか興奮した腹は、何か食わせると12時前に大合唱。下のヒモを引くと加熱される弁当を購入し、温かいご飯に舌鼓を打ちながら、静樹は今から向う故郷のことを思い出した。

静樹は小学校1年生までは、その町で暮らしていた。無理な開発をせず、山と野と共存する町。町の中心部へ行けばそこその店はあるが、田舎と呼ぶに些かの躊躇もない。ゲーセンなんかで遊んだ記憶なんてない。いつも、野山を駆け回っていた。

「そっぴや、あの子どうしてっかな？」

子供の頃、一緒に野山を駆け回っていた女の子のことを思い出す。いつも帽子を被っていたその子とは、本当に毎日遊んでいた。今思えば、よくもまあ飽きずに同じ子とばかり遊んでいたと思う。

だから、自分が都会に転校すると知ったときは、その子は物凄く泣いた。「じぶんは長男だから、いつかちゃんとかえってくるよ」と生意気なことを言った自分。子供のくせに、あのときから自分はそんなふうに、男の子は家を継ぐのが当たり前だと思っていた。

正直、海外に付いて行かなかったのも、その辺が大きい。静樹の父親は、静樹とは正反対の破天荒な人で「実家のことは祖父母が切り盛りしてるから、俺は好き勝手するんだよ」といつも言っていた。

まあ、祖父母もそんな父の親なわけで「ああ、お前らの好きなように生きればいいさ」と言っているが、静樹はやっぱり男なら実家を継ぐべきだと思う。だから、こうして故郷に戻っているわけだ。少し話しが逸れた。そう、女の子のことだ。

自分がいつか戻ってくると約束したら、その女の子は帽子をギュッと掴み、小さな身体を振るわせて言った。

「じゃあ。じゃあ。じゃあ。帰ってきたら、のっちをおよめさんにして」

静樹は女の子のことを「のっち」と呼んでいた。そのせいか、女の子も自分のことを「のっち」と呼ぶようになった。のっちは一回だけじゃ満足できなかったのか、一度別れてもまたやってきて、何度も何度も静樹と約束した。

時間は記憶を風化させてしまう。それに静樹は昔から人の名前と顔を覚えるのがとことん苦手だった。転向前の高校だって、最後の最後までクラスの女子の名前と顔を全部覚えることが出来なかった。男子でさえ、曖昧なところがある。

のっちの顔は思い出せない。名前も、のっちと呼んでいたことしか思い出せない。

もし、帰って彼女に再会したら、自分は彼女だと分かるだろうか？ いや、それ以上に彼女は自分のことを覚えているだろうか。それに、あの約束も……

もし約束も覚えていて、彼女にその気があるのなら、静樹は約束を果たす覚悟がある。約束を守るのは、人間として、男として当たり前だ。二言は無い。例え、相手がどんな子になっても。

「……………」

二言は……ない。

ただ、可愛い子ならなおいいなあ、と思ってしまった静樹は、自分の不謹慎さに頭をガラス窓に叩きつけた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4561ba/>

ハットトリックなんて呼ばせない！

2012年1月12日12時58分発行